資料館ノート　第51号　　平成16年5月16日発行

深川木場の歴史と文化　①

# 木場の変遷（1）

江東区深川江戸資料館

深川の歴史にとって、木場の存在は欠くことのできない要素です。本号から6回にわたり、木場の歴史や文化・民俗について特集します。その第1回目は、木場が江戸にどのようにして作られたのかをテーマにします。

## 徳川家康の江戸入府と江戸湊（みなと）

天正18年（1590）徳川家康が江戸に入り、江戸がやがて幕府の本拠地になります。家康はまず太田道灌（おおたどうかん）の時代からあった江戸城を拡張するため、神田の山を切り崩して城近くまで迫っていた入り江、日比谷の入り江を埋め立て、家臣や諸大名の屋敷地にしていきました。日比谷の入り江は現在の皇居和田倉門あたりまで入り込んでいたようで、『落穂集追加（おちぼしゅうついか）』によれば文禄2年（1592）には江戸城西の丸の濠（ほり）も作られ、それらの土も利用して（日比谷入り江沿岸の）漁師町も埋め立て・造成が進み、町屋のようになって看店などの商店ができたと開拓に沸（わ）く江戸の町を紹介しています。

この日比谷入り江の埋め立てにより、江戸城に至近の距離だった江戸の湊町が、ずっと東方へと移動することになりました。日本橋川・京橋川・隅田川口がそれです。このように、隅田川から内陸に掘られた運河全てを含みこんで湊としての機能を果たしていました。その一番北の奥にあたるところが2筋の堀留川です。慶長年間（1596～1615）に整備された日本橋川から角のように突き出したこの川は、もとは石神井川が流れていた名残りで、その河口部にあたるこの堀だけが残されて、船着場となりました。現在の日本橋人形町・掘留・小舟町付近が湊だったことになります。

## 町人地の形成と江戸前島

日本橋川の北側、江戸城常磐橋御門は当初大橋といわれ、将軍が出入りする門でした。その門から北東に伸びる道路が本町の通りです。江戸で最初に町割が行われたとされるところで、沿道には本町・大伝馬町・通旅籠（とおりはたご）町・通塩町などの古い町が並び、特権町人たちの店や屋敷が軒を連ねていました。

その本町の地域から日本橋川の南に広がる半島状の地域、江戸前島を整備して町人地、つまり下町を作りました。この江戸前島の中心を走るのが東海道・中山道の起点となる、通町の通りであり現在の中央通りにあたります。日本橋が架けられ東海道が整備されるにつれて、江戸一番の目抜き通りはこの中央通りに替わりました。

日本橋本町・材木町周辺
『寛永江戸図』（1624～44）　古地図史料出版。2本の堀留川周辺は廻船問屋をはじめ大問屋が集中していました。現在の中央通りの東側、楓川に沿って入り堀が並んでいます。

## 最初の材木置場

こうした江戸の建設にあたって、建築資材としての木材や石材は必要不可欠なものでした。この時期、材木はどこに集められていたのでしょうか。『事蹟合考（じせきがっこう）』によれば徳川家康入府の頃は、道三河岸（どうさんがし）に材木商が軒を並べていましたが、江戸城が拡張され、武家地になったため、楓川（もみじがわ）の西岸に移されたと記されています。楓川とは町人地に定められた江戸前島の東側の海岸線と考えられ、東隣の八町堀界隈の地域との境界になっていました。『寛永江戸図』には楓川の高橋（海賊橋）の南から弾正橋の間に8本の入り堀と南北に並ぶ材木町

『江戸名所図屏風』 出光美術館蔵
入り堀付近の材木置場。船から陸へ向けて材木を投げている。

が記されています。この船入堀が材木を陸揚げするための船着場で、江戸湊の役割を果たしていました。

この入堀の成立は鈴木理生氏によれば、慶長17年（1612）頃のこととされ、石材の集散地として設けられたとされています。江戸城の整備とともに武家屋敷・寺社・町人地等の建設には、資材がいくらあっても足りないほどだったのではないでしょうか。こうして江戸最初の材木置場が広範囲に造られ、新興都市江戸の成立・発展に大きく貢献しました。

## 火災都市・江戸の苦悩

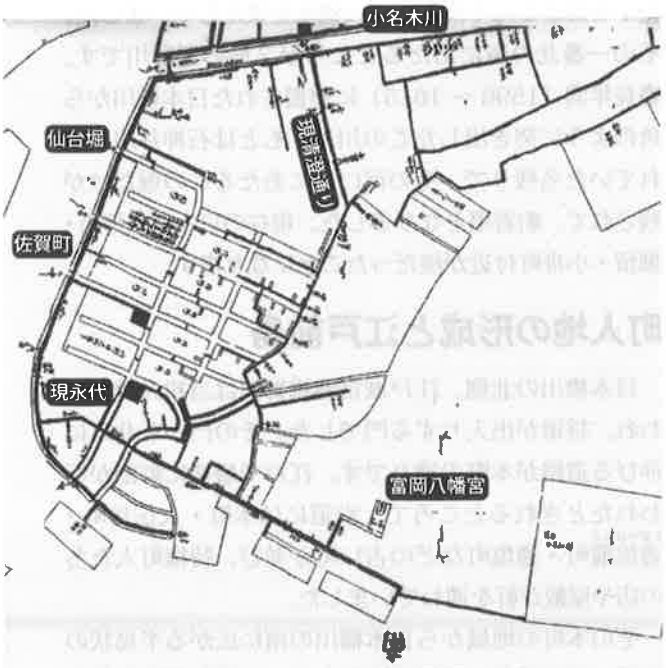
しかし、都市として充実すればするほど、火災による被害は増大しました。武家地・町人地を問わず、火災が発生すれば多くの町々へと延焼していきました。寛永4年（1627）9月の火災は、横山町（現中央区）から出火、40カ町にまで被害が及びました。同16年（1639）の火災では江戸城内が焼失するという事態まで発生しています。同18年（1641）の大火も同様に大きな被害がありました。正月29日京橋桶町（現中央区京橋・八重洲）から出火し、烈風により翌日まで延焼、南は宇田川橋（現港区東新橋）、東は木挽町海岸（現中央区銀座の東部）、北は御成橋（幸橋のこと　現千代田区内幸町）、西は麻布（現港区）と、当時の江戸町人地の南部全域を焼いたことになります。被害町数97、死者は数百人といわれました。

## 材木置場が深川へ

この火事で、材木置場の材木まで焼失し、価格は高騰、またこの高積みされていた材木が延焼の原因だったと認識されました。そこで幕府は防災と材木の恒常的確保のため、隅田川以東の深川に材木置場を移転させる計画を立てました。

神田佐久間町・日本橋本材木町・三十間堀周辺の35カ町に及ぶ材木商たちが材木置場を深川に移しました。これが深川と材木との「出会い」ということになります。深川最初の材木置場、「初代の木場」は佐賀町・福住周辺でした。このあたりは隅田川沿岸で河口部にあたるところで、江戸初期から半島状の陸地があり、材木置場が移転してくる10年ほど以前、寛永6年（1629）に深川猟師町が造られたところです。深川の漁業の本拠地だったところに材木置場が進出してきたのですから、その変貌ぶりは驚くばかりだったでしょう。この時に隅田川から東へと流れる仙台堀・中之堀・油堀が開削され、材木の運搬・保存に活用されました。深川が材木置場として選ばれた理由は、第1に材木という商品の性質上、広大な土地が必要で、開発された江戸市中では確保できなかった。第2に深川は海に近く、運河に海水が混じり塩分があるため、材木に虫がつきにくい。といったことが上げられます。こうして材木の街・深川が誕生しました。

日本橋にあった材木町の入り堀は、霊巌島・八町堀・築地周辺の埋め立て整備が進み、使命を終えたので、元禄3年（1690）埋め立てられました。




深川最初の材木置場
『寛文11年（1671）江戸図』（『江東区史』1957年刊）より
縦横に掘割が開かれている。